

『巴里籠城日誌』校訂現代語訳 (5)

松井道昭・横堀恵一

『巴里籠城日誌』旧名「法普戦争誌略」

渡正元 著

巻の5

西暦1870年12月25日（和暦明治3庚午年11月4日）。

12月25日¹

欧州に世界の有力国が集まり、万国が深く羨む。そして、その中、強国と言えるのは、英、仏、普、露、墺、伊が主である。これらの国は、皆、長い間その軍備を蓄え、その威力を競い、ついにはお互いに盛んに侵略や攻撃をしようとし、並立できなくなり、この夏、仏普2強国の開戦から既に5ヶ月経ち、仏国パリの籠城がほとんど100日になる。そして普軍の威力は、日毎に盛んで、その破竹のような勢いは、間近にパリ城を陥れようとする。今、普国がこの機会に乗じ、またルクセンブルクを併合しようと企てている（このルクセンブルクは、仏白（ベルギー）独3国に挟まれ、かつて蘭（オランダ）に属していた。しかし、少し前、欧州の有力国が相談し、この土地を分け、独立国とした。まず、1839年8月18日、仏、英、露、普、墺、伊、蘭、白等諸国が会合し、条約を作り、その強大な力でこの国を脅かし、威嚇してはならないと約束した。その後、1867年3月11日、英国ロンドンで大会議を開き、英、仏、露、普、墺、伊、蘭、白等諸国の全権代表が皆、参加し、お互いにその国を助け、強暴な行為を慎むと誓う7か条の新条約を作った。そしてもし、この条約の締結国中の一国がこの国

¹パリは、晴。

に傲慢に強暴な行為に及べば、その他の締約国が協力し、制裁する。この誓約が確固とした決定であり、変わらない。その抄訳をここでは省略する)。この条約があるのに、露普2強が互いに助け合い、密かにその勢力を欧州に広げようと企て、この夏以来、独国が仏国と戦い、勝利に乗り、その土地を占領し、その地域を併合しようとする。ここで、露国がその腕を伸ばし、トルコの地を併合しようとする。そして、普国がまたその威武を誇り、ルクセンブルクを取ろうとし、新たに使者を英、墺の諸国に送り、ルクセンブルクの誓いを破ろうとした。しかし、普露両国が協力し、その思いの俥にしようとするので、英国も、今この条約の破棄の申入れを拒めない状況である。まだその成行きがわからない。昔から強暴な者は、不正で道理を制する。今、普国に勢いがあり、人がその傲慢さを憎むべきと分かっている、あえてこれを抑えられない。今の英国の武力でも、これに対抗することは難しいとみえる。これから先のことは、どうするのだろうか。

北独同盟で普王を独国の帝位につかせようと計画し、さる12月14日、北独同盟議会の議員が30名、言上の一文書を作り、仏国ヴェルサイユ城の本陣で普王に捧げるため、出発した。その内容が以下のとおりである²。

寛大な王にして、君主へ

陛下の呼掛けに応じ、人民は、指導者の周りに集まり、犯罪のように挑発された祖国を外地で守る。戦争が大きな犠牲を強いる。しかし、かくも大事な息子たちを失って、経験する苦しみが、より安全な国境が嫉妬深い隣人の新たな攻撃から平和をしっかりと守るようになるまで武器を置かないという、固い決意を動揺させることはない。忠実な独同盟軍が陛下にもたらした勝利により、国民が永続する連合を期待する。北独同盟議会は、独諸君主と同意し、陛下に対し、独皇帝の冠位を受け、統一の事業に献身されるよう願った。陛下の頭上の皇帝の冠が法による保護の下、独国に再建された帝国に力強さ、偉大さ、平和、繁栄と自由の日々

² 12月25日付 le Journal des débats 引用の l'Electeur libre 掲載の12月16日付 la Gazette de Breslau 記事の仏語訳で、「一昨日30名の議員が出発した」旨記載があるので、14日のことと判断される。

を開くであろう。祖国は指導者と光輝ある軍に感謝し、その先頭に征服した地で陛下がおられる。国民が陛下の子らの献身と武勲を忘れまい。神よ、光輝ある独皇帝による平和を人民がやがて享受できるように祈る。統一した独国はその王の下の戦争で強さを示したが、独帝国は強大で、平和を皇杖の下、愛好するであろう。陛下にとり、極めて慎ましく、忠実な北独同盟議会より。

今日は、キリストの誕生日（ノエル祭日³）で欧州各国の大祭日である。12月26日⁴、パリ市の籠城は、今日で既に100日である。

近日、戦争の報道がない。この朝、戦況報告⁵では、昨日、終日諸軍が野外に駐屯し、築城のため土木工事の兵士を使ったが、地中50センチメートル（日本の1尺5寸余り）のところが全て凍り、働けないという。今日の寒気が野外の陣営では、非常に苦難であることを市民に知らせるためなのだろう。

1870年12月24日付国防政府令⁶で、（去る23日の戦い）に陣頭に立って指揮し、戦死したブレイズ准将の葬礼を国費により行うこととし、軍務大臣がこの命令を執行すると発表した。

12月27日⁷

今日は雪が降り、市中に3寸積もった。

12月26日、夕4時27分発、司令官ヴィノワ將軍の報告⁸に今日メゾン・ブランシュの地で先陣の兵の小戦があった。味方が1人戦死、8人負傷、うち1人は士官であった。等々。

昨日、政府の布令が新聞中にあり、『パトリー』⁹という新聞社が3日間その営業を禁止され、新聞を出版することができない¹⁰。この新聞が軍中

3 クリスマスのこと。

4 パリは、晴。

5 12月26日付官報。

6 12月25日付官報。

7 パリは、「雪風殊更に厳酷」。

8 12月27日付官報。

9 "La Patrie"（「祖国」の意味）

10 出典未確認。

の兵隊の挙動を掲載した（これは、かねてから軍務省が発表していた一つの大きな禁止事項である）ためである。

12月28日¹¹

パリの砲撃が始まる。

昨27日夕の戦況報告書¹²による。今朝から普包囲軍砲台が姿を現し、我々の東（レスト）、ノワジィからノジャン諸要塞、アヴロン高地要塞の一部を攻撃した。敵砲台は、皆遠距離砲から構成されていた。11時現在、上記砲台への砲撃も激しく、敵攻撃を撃退する総攻撃の前触れとしてあらゆる措置が取られている。今夜、モン・ヴァレリアン要塞の外で、ルアン線の鉄道鉄橋の破碎と思われる大きな爆音が2回轟き、響いた。今朝、普軍がショワジーの牛駅（ガル・オ・バフ）を破壊した。これらは、100余日と長いパリの籠城、抵抗に敵軍が持て余し、長い間集めた長距離砲で、この攻撃を始めたのだろう。敵の攻撃はパリ市民の勇気を高める効果しかない。普軍は、エルミターージュからレンシィまでの道路上、また、ガニー、ノワジィ・ル・グラン、グルネイ各所に大口徑の諸砲台を造営した。今朝から上記の砲台がノワジィ、ロニィ、ノジャンの要塞、アヴロンの陣地に向け、激しく砲撃した。砲撃戦は、5時まで続いた。我が損失は、死者約8人、負傷者が海軍士官4名を含む50名であった。我が強力な砲火が敵に相当の損失を与えたはずである。等々。

今日、我が軍左翼の司令官ヴィノワ将軍が軍中に発表¹³した命令。

過日、ブレイズ将軍が接近戦をし、陣頭で指揮し、戦死した日、軍の規則に違反し、我が国民衛兵隊の士官や兵士がその隊から脱走したという。これは、全く一時的な状況の変化から起きたとしても、そもそも軍中に厳格な命令があることは、皆が当然知っているところである。たとえいかなる事変が起こっても、その隊から脱走し、軍の規則に背いてはならない。今後、その兵器を捨て、陣中から脱走する者を直ちに捕え、

¹¹ パリは、小雪、気温零下6度。

¹² 12月28日付官報。

¹³ 出典未確認。

軍の規則に従い、厳罰に処する。等々。

今日終日、遠く城郭外に砲声が絶え間なく響き、轟くのを聞く。これは今朝から普軍が諸要塞を攻撃するものだという。

12月29日¹⁴

昨28日朝10時30分発トロシュウ大統領の戦況報告¹⁵による。敵軍が昨日ほどの激しさでは、アヴロン陣地を攻撃しなかったが、砲火が止まなかった。昨日、トロシュウ大統領がアヴロンを朝から視察したが、異常がなかった。ボンディと付近の砲台が森の中に正確に砲撃し、敵を悩ませた。セイヌ第5大隊デルクロ指揮官の部隊がバ・ムードンなどで活発に偵察し、敵軍が何人か捕虜を残し、退散した。偵察隊がイッシュ要塞に戻る際、かなり激しく砲撃されたが、敵が撃退された。我が軍に戦死2名、負傷6名があった。等々。

昨27日のアヴロン高地の死傷士官は、戦死が副官の大尉1名、大尉1名、少尉1名、従軍司祭1名、負傷が海軍陸戦隊大尉2名、少尉1名、海軍中尉3名、海軍大尉1名、国民衛兵大隊長1名、支出官1名、大尉2名、少尉1名、全16名である¹⁶。

昨日市内にあった発表¹⁷。

例のない厳しい寒さが我が兵に極めて酷い苦痛を与えている。市民の愛国心に訴え、羊の毛皮、毛の靴下や手袋を提供できる全パリ住民がそれらを自分の区役所に持参するようお願いする。区役所がこれらを軍務省に渡す。

27日の発表¹⁸。

国防政府、各閣僚、主要官僚は、元旦の儀礼を遠慮する。各人は、この措置の必要性和適切さを理解されよう。

14 パリは、晴、寒気酷。

15 12月29日付官報。

16 12月28日付官報。

17 同上。

18 同上。

27日の発表¹⁹

パリの都心から離れた区の様々な場所で極めて遺憾な混乱がある。多くは余所者の集団が空き地の囲い板を剥がし、ある者達は、資材置き場を荒らし、ある者達は、庭に入り込み、樹木を切り始めたりする。この悪党を追い払うには国民衛兵の巡回で十分である。多数の逮捕もあった。これらの犯人は、軍法会議に送られ、市民に危険な問題を起こす行為の再発を防ぐため、厳しい措置が取られよう。敵が我々に攻撃しようとし、市が全力で反撃しようとする時に、秩序の維持と法の執行を断固として行うことは政府の義務である。パリ市長は、数日来、パリ周辺の森で燃料源を増やすための伐採を命じたところである。等々。

今日の新聞中に、昨夕、仏兵死傷者40名と病人40名を市内に送り、病院に入れたという²⁰。

今日、城郭外の要塞や城において終日砲声が轟き響くの聞いた。

12月30日²¹

昨29日付戦況報告²²による。敵軍の攻撃が午後と夕刻極めて激しかった。このため、我が砲撃隊が発砲を止める他なかった。大統領が大砲を要塞の後ろに引き揚げさせた。また、アヴロン高地の陣地を前夜撤退した。陣営を維持することもできなかった。引き揚げた74門の方はほぼ無傷であった。日中の敵の猛烈な砲撃が殊にロニイ、ノジャンやノワジイ要塞に向けられたが、非常に大規模で、長距離からの雨のように降る砲弾の下で、冷静に対応した。等々。

去る27日以来、普軍が砲撃し始め、連なった諸砲台から遠距離に達する大砲で仏軍の陣地、諸要塞やアヴロン高地等を同時に猛烈に撃ち、その勢

19 12月28日付官報。

20 出典未確認。

21 パリは、曇。酷寒。気温零下6度。

22 12月30日付官報掲載の複数の報告で31日の項の記載と重複。なお、『漫遊日誌』旧暦8日（新暦12月29日）の項に、今夜、太田が来て語るには、今朝、仏軍パリ城外のアヴロン山の陣営を棄て、退陣し、74門の大砲を引き揚げたが、これはこのところ、独軍の長距離砲で日夜激しく攻撃されたためであるとのこと、と記載する。

いに逆らえず、仏軍前衛が皆撤退し、砲撃を避けた。そこで、昨日非常に多くの砲弾が雨のように降ったが、仏軍の死傷者が僅か死者2名、負傷者6名に過ぎなかった²³。昨日、仏軍がついにアヴロン高地を守れず、その歩兵と砲兵の2軍を引き上げた。

近頃、独軍が猛烈に発射する大砲を普国のクルップの大砲という。このクルップの大砲が欧州の陸戦では、無二の長距離の大砲である。今を去る3年前、1867年、パリ博覧会に普国がこの大砲を出展し、世界中の人の目を驚かせ、万国の人の胆を冷やしたという。仏人は、昔からよく知っており、常にこの大砲に恐怖をもって久しい。今、普軍がパリ攻撃にこの大砲で近距離からパリ城郭外の諸要塞を撃つ。仏軍の大砲がこれに応戦できず、一層、兵の気力を挫く。

今朝未明から夕暮れ後まで、砲声が市内に轟き、実に絶え間がない。これは皆、普軍があの大砲で城郭外の2、3の要塞を攻撃し、仏軍が要塞から応戦する大砲の響きである。

仏国も、当然大砲を多く持つが、遠距離に到達する普国のクルップ砲に比べられるものがなく、一昨日以来、敵の弾丸を受けるだけで、これに対抗できなかった。アヴロン高地の近くの村に配置した砲兵の諸部隊を引き上げ、皆要塞中に入ったという。

このクルップ砲の弾丸が8,000から9,000メートル（我が国の2里から2里10町）の地点に達する。そこでパリ市民は、皆この大砲を恐れ、内心舌を巻いた。

12月31日²⁴

戦況報告²⁵による。昨日、普軍が我が4要塞とアヴロン高地の陣地を終日猛烈に砲撃し、勢いが防ぎ難く、アヴロン高地の兵隊と74門の大砲を全て引上げ、辛うじて退陣した。同日、この長大砲による4要塞の死傷者が次のとおり。ノジャン要塞中、負傷者14名、ロニイ要塞中、死者3名、負

²³ 31日の項の記載の通り、これはボンディ要塞のことである。

²⁴ パリは、曇。気温零下6度。

²⁵ 30日の項記載の30日付官報掲載の29日付戦況報告のやや詳細な引用。

傷者9人。ノワジイ要塞中、負傷者若干有り。またボンディ要塞中、死者2名、負傷者6名。等々。

28日付第2地区司令官の報告²⁶による。同日、普砲兵発射の砲弾が5,000から6,000発と思われ、非常に多くの砲弾が落ち、ロニィとアヴロン間の道が使えなくなった。村や鉄道で負傷者が出た。

ヴァンセンヌ城への通報²⁷による。夜極めて静かで異状がない。昨夜8時半、普軍がこの要塞に向け発射した長大砲の砲弾4発が要塞の上を飛び越えた。また、敵兵が何人か砲台の国民衛兵と銃火を交えたが、その弾丸がこの城の堀の中に落ち、城中に負傷者がいなかった。等々。

モン・ヴァレリアン城の29日付報告²⁸による。ルアン鉄道の鉄橋に変化がない。一昨日、敵兵がサン・ジェルマン鉄道の鉄橋を破壊した。また、敵軍が日々兵力を増やす。

30日夜付戦況報告²⁹による。敵の砲撃が今朝7時45分に再開し、日中の一部は、その砲火が激烈であったが、深刻な効果がなかった。主な目標のノジャン要塞では、3人しか負傷せず、ロニィ要塞で2名負傷した。ノジャン要塞が朝8時から夕4時半まで砲撃された。総督自身が要塞守備兵の士気と団結を目の当たりにした。等々。

パリ籠城が100余日となり、市民の気持ちが大きく挫け、嫌気がさし、最近、しきりに休戦の策を望む状況である。以前、9月4日に政治体制を一変し、共和制度にしてから、人民は、ただ政府の動きを仰ぎ望み、トロシユウ大統領がきつと普通ではない働きで、速やかに敵を追い払う成果を挙げると思っていたが、今では籠城が既に100余日に及び、トロシユウが軍頭で指揮しても毎日毎夜、敵軍の乱入を聞き、これを抑える良策があることを聞かない。また、市内の食料や諸物品がまさに尽きようとするので、市民には、トロシユウ大統領の処置が果断でなく、遅く頼りにならないと

26 12月30日付官報。冒頭に、モントルイユ門の参謀将校報告とする。

27 上記官報掲載。

28 上記官報掲載。

29 12月31日付官報。

言う者もあり、そのため民衆が指導者を選び直そうと密かに主張し、動揺させようとする。このため、トロシュウ大統領が市内の諸街路に広く以下の宣言³⁰を壁書きした。

市民と兵士諸君！パリの籠城が100日を超えても我らが挫けず、抵抗するのは連帯の気持ちと相互の信頼の賜物であるが、それを打ち砕こうとする大きな試みがある。敵は、盛大に宣言した、このクリスマスの祭日にパリを独国に捧げることを諦め、守備軍を苛立たせようと様々な脅迫の上、我が前衛陣地や要塞を砲撃する。異常な冬、疲労や終わらない苦痛が我らを苦しめるという誤算を世論に訴えようとする。また、政府閣僚に課せられた大きな利害の方向につき、彼らの中で意見が違ってもいわれる。軍は、他の軍が経験したことのない敵の激しい砲撃で必要な短い休息も妨げられている。軍は国民衛兵の協力を得、作戦に備え、一丸となり、任務を尽くそうとする。私はここに宣言する。政府の会議で意見の違いはなく、不安と国の危機に面し、解放を思い、希望し、我らは緊密に団結する。

1月1日（和暦明治3庚午年11月11日）³¹

12月31日付戦況報告書³²による。敵が大口径の砲兵隊を増し、その中の多くを攻撃地点に近づけている。本日中、かなり多数の砲弾がグロスレイの農園³³、ドランシィ、ポビニィ、ボンディに、又、幾つかの弾丸がラ・フォリオとノワジィ・ル・セックまで飛来した。同時に、敵がロニィ、ノジャンとノワジィ諸要塞城を砲撃した。しかし、幾つかの物的損害とごく少数の負傷者しかなかった。

昨31日夜、市庁舎中で一つの会議があった。諸軍司令官が全員会合した³⁴。等々。

30 12月31日付官報。

31 パリは、晴。酷寒。

32 1871年1月1日付官報。

33 ブルジュの戦いの戦場近く。近くにモンモランシー要塞（同市）、ラ・ピュット・パンソン砦（モンマニー市）がある。

34 出典未確認。

今朝、新聞中に、政府が今処置すべき2つの課題があるという³⁵。

その1は、今日の市内の状態は、政府がなお一層の軍事力を奮い、抗戦し、決着をつけるべきか、もしそうであれば、その策略をどうするのか。その2は、現在の事情で、戦って興廢が一度に決められなければ、断然終戦にし、和平を図るべきであり、もしそうであれば、どう進めるのか。まさに、今事態が切迫し、終戦和平の他に策がない。察するに普軍は、既に長い間の包囲戦に飽き、うんざりする様子である。ヴィルヘルム国王、ビスマルク首相もまた、別の考えではなかろう。今、もし速やかに和平を図れば、我が共和制度を維持できるだろう。また、我が軍の敗戦が極まり、普軍がその必勝を極めるならば、あの傲慢でわがままな普王が我が国に一層、苛酷となり、必ず、再び新たに国王をおこうとするだろう。このため、今日は速やかに和平を図ることが我が共和制度にとり良い策であると。等々。

今日、市内の事情がまさにこのようである。人民が既に食料に困窮し、戦争に疲弊し、抗戦の気分も段々緩み、民衆が皆、和平を望む。また、政府の事情を良く見ると、政府は、自ら、その武力がこの強敵の噛み取るような勢いに敵わないと深く理解する。しかし、諸地方の国民衛兵が敵の背後に迫ることを内心期待する。今もし和平を望めば、あの強大な2地方³⁶を分割し、加えて50億フランの賠償金と手足と頼む海軍を奪われよう。このため、躊躇する。また、この共和制度を永久化しようと、その策を諸軍の将帥に問い、密かに人民の意向を知ろうとする。今、私は他国から来た、一人の学生に過ぎないが、これを傍観し考えると、今日の政治につき、よくその内容を理解してはいない。しかし、以前の内政変革の日に、今日のように切迫する可能性があることを当然予想できたはずで、当然、確固たる一定の方策をたて、少しも躊躇すべきでなかった。なぜならば、この戦争を起こした始めから、仏軍の敗戦の報告が日夜来て、兵の気力が大きく挫折し、敵と争えない状況であった。ついに、9月4日、ナポレオン仏帝

35 出典未確認。

がスタン要塞の籠城に敗れ、自ら抗えないことを知り、敵の軍門に降り、その軍の將軍兵士と共に捕虜となった。この時、仏国は、急に内政を変革し、共和制度を立てた。当時、今回の戦は、ナポレオン仏帝が自ら好んで起こしたもので、かつて一度も仏人民が求めたこともなく、あえてこれに関わらないと仏人皆が言った。一斉にその失策をナポレオンのせいにし、民衆が競い、逃げ口上にしたのは非常に醜くやかましい。普軍も今度の戦争では、我々はナポレオンと戦い、仏人民と戦うものでないと言う。これは、実にご都合主義である。そして、今もしさらに政府を委された各大臣政府諸官達がこの機に乗じ、開戦の罪をナポレオンのせいにし、急に和平を謀れば、普王の望みが決して例の3大問題³⁷には至らないだろう。その理由は、仏帝ナポレオンがその軍とともに全てスタンで捕虜となっても、その残りの精兵がまだ数多く、かつ有名な老練の将帥がこれを率い、前後におり、また、パリも簡単には陥落しないことを知っているからだ。そこで、仏共和制度を立てた初め、ナポレオンの起こした戦争の和平を図れば、その補償金が僅かで、その後の損害も受けず、仏国の挫折が今日のようにならず、共和制度の功績が大きいといえた。そして当時その和平を図り、その賠償として土地を譲れば、金貨、海軍を維持できた。しかし、その状況が今日のように切迫し、仏政府に抗戦する策略がなく、和平する方法がなく、日々逡巡するうちに、外には敵軍が日夜に迫り、内には朝夕にも食料が尽き、飢えて叫ぶ声が街区に満ちている。結局、鷲、鷹、豹や虎が嘯みつき殴るに任せる他ない。このため、仏国の内政変革の時機だとはいえない。また、その国のためにもならないと私は、思う。

1月2日³⁸

1月1日付戦況報告³⁹による。昨夜、大半の夜中、敵が砲撃した。我が軍に死傷者が若干あった。ボンディへの砲撃が夜中倍加したが、ロニィへの

36 アルザスとロレーヌ地方のこと。

37 アルザス・ロレーヌ割譲、賠償金50億フランと海軍分割を指す。

38 パリは、曇、雪。

39 1月2日付官報。

砲撃が並みであった。今朝、攻撃が激化し、ほぼ休みなく射撃が続く。

新聞の附録⁴⁰にある。

去る9月4日に仏国が共和制度を立てて以来、政府はこの市城を守る他に策がない。民衆が皆その挙動を仰ぎ見ている。そうであるが、今日切迫が極まってもなお、確固とした態度をとる様子がなく、我が民衆が何を目標とし、何を仰ぎ見るのだろうか。今日すべき事は、講和するというただ一つであり、他にはない。その理由の一つは、今、市内の人民が格別に発憤し、城郭外に満ちている敵兵を追い払うべきであるが、その策略をどうするのか。その二は、今、市内の軍が敵を追い払うのに足りなければ、速やかに講和を交渉し、平和終戦を謀る他に道がない。今、政府が明確にその方向を定めるべきである。今日なすべき事は、ただ、戦争か平和か二つがあるのみである。等々。

新聞に載っているパリ市内20区居住者の人数は次のとおり⁴¹。

区	人数 (人)	区	人数 (人)	区	人数 (人)
第1区	77,831	第8区	75,880	第15区	92,807
第2区	77,671	第9区	102,215	第16区	44,034
第3区	96,422	第10区	141,485	第17区	120,064
第4区	96,341	第11区	183,723	第18区	154,517
第5区	98,213	第12区	100,877	第19区	113,716
第6区	90,803	第13区	79,828	第20区	108,299
第7区	68,883	第14区	82,100	総計	2,005,709

この数字は、陸軍、遊動兵、海軍を含まない。

1月3日⁴²

1月1日夕発戦況報告⁴³による。敵の砲火が午前11時から次第に減り、午後、ノワジィとロニィ要塞へはほぼ止んだ。ノジャン要塞へは、緩慢な

40 出典未確認。

41 1月1日付le Siècle。

42 パリは、晴、雪。

43 1月2日付官報。

砲撃が続き、要塞中1名の負傷者があるだけだった。

1月2日朝発戦況報告⁴⁴による。昨夜は静穏であった。2、3の爆発がシャティヨン⁴⁵高地で聞こえた。トゥール・デザングレ塔⁴⁶が爆破された。敵が活発に活動したようだ。敵のノジャン、ロニィ、ノワジィとその周囲の村落への砲撃がこの朝から今なお続くが深刻な損害がない。ノジャンへの砲撃が極めて激しく、飛弾が、多くは空中で破裂するが、村に向かうという。等々。

1月4日⁴⁷

1月2日夕発戦況報告⁴⁸による。敵の砲火が今日ノジャン要塞に向かい、その数は600発であった。しかし、物的損害なく、ただ軽傷者1名のみであった。

1月3日朝、戦況報告⁴⁹による。今朝、グロスレイ近くで斥候兵が小さな偵察をし、普軍の数名を殺し、6名を捕虜にした。我が方は、1名の士官を含む3名が負傷した。今朝から砲撃戦が始まったが、特段の損害はない。ノジャン要塞では、この朝から夕4時45分まで、砲撃が特に激しかったが、ただ1人の軽傷者のみであった。ボンディ要塞への砲撃が1分間に3発の頻度であった。ロニィ要塞では、砲撃がかなり弾丸の爆発で3名が軽傷を負った。

今日、新聞附録中に、ナポレオン第1世の経歴を記したものがあつた。そこには、過去に西暦1810年代に欧州の数々の実力者全てを追い払い、ほとんど欧州を席卷し、掌握しようとした仏帝ナポレオン第1世は、最後の一戦で大きく敗れ、英国により捕虜となり、アフリカ西部のセント・ヘレナの孤島に送られ、6年の後1821年、ついにこの島で亡くなった。つまり、今を去ることまさに50年である。帝がこの一孤島に流され、亡くなる前、常に慨嘆し、長い溜息をついて言った。50年後、欧州に一大変革があ

44 1月3日付官報。

45 パリ南西郊外の市。

46 「イギリス人の塔」の意味。シャティヨン市の南西部にあつた。

47 パリは、晴。寒い。

48 1月3日付官報。

49 1月4日付官報。

り、各国がそれぞれその国の体制を変化させ、我が仏国のような国は、全て露国に併合されなければ、共和制度となるだろう。そして露国、独国の間で最も強大となる時があり、その勢いが欧州を制圧するだろうと。しばしばこの言葉を述べ、亡くなったという。奇妙なものだ。実に今年3月5日、ナポレオンが亡くなった日からまさに50年の年月が経過する。そして今欧州各国の盛衰状態を見れば、まさにこのとおりになっている。ああ、才智ある英雄の優れた見識には、また感嘆の他はない。

ナポレオンの業績は、万人がよく知るところである。しかし、私は今、その生前の経歴の年月をここに付け加える。帝の姓はボナパルト、名はナポレオンと称する。その父は、シャルル ボナパルトという。地中海コルシカ島アジャクシオの身分の低い役人⁵⁰であり、この地に住んでいた。1768年8月5日、ナポレオンがアジャクシオに生まれる。1777年、ブリエンヌの士官学校に入る。9歳の時である。1784年、パリの兵学校に入る。16歳である。1785年、軍務初等士官の中尉となる。17歳であった。1795年、將軍の位に登る。27歳。1804年3月18日、仏帝の尊号を得て即位し、帝王の位に登った。これをナポレオン第1世と称する。36歳であった。1812年9月14日、露国を攻め、モスクワに入り、退却した。1814年4月11日、帝位を剥がれ、エルバ島へ流されること10か月、翌15年2月26日再び仏国に入り、兵を集め、再びパリ城に入り、帝の座についた。1815年3月20日である。同年6月18日、ワーテルローの一戦に敗れ、英国の捕虜となり、同月22日、アフリカ西部の一孤島であるセント・ヘレナ島に流された。6年この地において、1821年3月5日島で亡くなった。時に52歳であった。今を去ること、実に50年である。

1月5日⁵¹

籠城が既に110日である。去る12月27日以来、日夜普軍が例の長大砲でパリ城郭外の諸要塞を攻撃し、その砲声が絶え間ない。

⁵⁰ ナポレオンが生まれた後、アジャクシオの判事補に任命され、コルシカの貴族にも選出された。

⁵¹ パリは、曇。

昨4日、一日中激烈な砲声が聞こえた。今朝このことを聞くと、敵軍がモン・ヴァレリアン城を激しく砲撃し、また城中からもこれに応戦し、両軍の砲声が震えるように轟いたという。また、今日非常に激烈な砲声が轟くのを聞いた。

4日朝1時発の戦況報告⁵²による。今暁4時頃、普軍の一隊がメシュ農園前を奇襲しようとし、激しい銃撃を受け、何人かの怪我人を担ぎ、駆け足で逃げた。半時間後、我が斥候が敵の巡視隊を奇襲し、普兵3名を捕虜にした。同夜、敵兵がモントリュユとボンディの要塞を同時に激しく砲撃したが、大きな損害がなかった。等々。

4日夕の戦況報告⁵³による。今日、東部要塞に敵が砲撃を続け、ノジャン要塞が砲弾1,200発を受けたが、前日以上の損害がなかった。

普軍の長大砲について新聞中に付録でいう。去る12月27日以来、普軍が長大砲でパリ市外諸城砦を攻撃する。日夜、朝晩の間隙もない。この27日から1月1日夜まで6日6夜の間、これら要塞に発射した全砲弾が2万5千発となる。この砲弾1発の重量が50キログラム（我が国の13貫333匁である。）、この2万5千発の総量が125万キログラム（我が国で33万3,333貫目である。）となる。この砲弾を独国からパリ城外に運送すると220両のワゴン（汽車の中の貨車である。）が必要だという。この長距離弾1発の費用が69フラン（日本の約14両）であり、この2万5千発の費用が172万5,000フラン（日本の34万5千両）に上るといふ。

1月6日⁵⁴

1月5日夕5時、政府より市街への発表⁵⁵

パリの砲撃が始まった。敵は、我が諸要塞を攻撃するのに満足せず、我々の家に向け弾丸を発射し、我々の住まいや家族を脅かす。この暴力は、戦い、勝とうとするこの市の決意を倍加するだけである。絶え間な

⁵² 1月5日付官報。

⁵³ 1月5日付官報。

⁵⁴ パリは、晴。

⁵⁵ 1月6日付官報。

い火で覆われた要塞の守備兵がその冷静さを全く失わず、攻撃者に恐るべき報復を行うであろう。パリ市民は、この新たな困難を勇敢にも受け入れる。敵がパリ市民を脅えさせようとするが、強力な反撃を受けるだけだ。パリ市民は、敵を撤退させたロワール軍や我々の救援に向かう北部軍にふさわしい。仏国万歳、共和国万歳。

戦況報告⁵⁶による。クレトイユ陣地でバイエルン軍士官1名を捕虜にした。今朝、敵兵ボンディ要塞を襲撃したが、狙撃兵は撃退された。朝8時から夕4時半まで、ボンディ要塞と東部諸要塞が砲撃されたが、例により、損害がなかった。一日中、イッシ、ヴァンヴとモンルージュの諸要塞が大小の口径の砲で激しく射撃された。砲弾が幾つかサンジャック⁵⁷通りまで届いた。今日、戦死が士官1名を含む9名、負傷者が士官4名を含む約40名である。昨夜、敵が夜通し、ノジャン要塞を砲撃したが、効果がなかった。今朝から敵兵がモンルージュ、ヴァンヴ、イッシの3要塞に向け激しく射撃した。敵の砲台がシャティヨン高地にあった。我が諸要塞からも激烈に応戦した。等々。

後装砲⁵⁸は仏国の近年の新製品である。その弾丸の形が尖った円柱であり、かつ旋條弾である⁵⁹。

(原本に長さ 8寸1分5厘8毛、直径2寸8分3厘の砲弾の図)

この弾丸の速力は、1秒毎に400メートル(約211間)を飛行する。そして、この弾丸が砲口を出た後、1メートル80センチメートル(日本の5尺9寸4分)を過ぎる間に1回転する。これはその弾丸に旋條があるためである。そこで、1秒間に螺旋状に212回回転する。その速力が迅速であるので、弾丸の威力が激烈であることを理解できる。

普軍が一昨日以来、あの長距離カノン砲を発射し、パリ城南西の要塞の

56 1月6日付官報掲載の幾つかの報告の要約である。

57 パリ左岸の5区にある大通り。

58 弾を砲尾から装填する大砲のこと。

59 出典未確認。原本記載の砲弾は、長さ約24.7センチメートル、直径約8.6センチメートルとなる。

外から市内の鉄道を崩壊しようとし、やたらに多く発射する弾丸が乱れ落ち、市内の西南の隅で破裂し、近辺の人家を少なからず損壊した。これにより、街の中で男女の死傷者が若干あった。

今朝、私の知人の仏人1名が来て、話すには、その友人、某中尉が、昨夕外の陣から市内に入り、この街の中を過ぎ、家に入ろうとしたところ、忽ち、あの砲弾が飛来し、その脇腹に当たり、左の手足がともに吹き飛び、全身が破れて亡くなったという。

昨夕、パリ市セイヌ河の左岸にある兵学校の側の運動場⁶⁰に弾丸が2、3発飛来したという。

1月7日⁶¹

昨6日夜戦況報告⁶²による。モンルージュ、ビセートルを含む南部の諸要塞へは、1時間に30発の砲撃があった。ノジャンに、敵の砲撃が明け方3時から止み、8時に強烈な砲撃が再開された。その時刻から全線で再開された砲撃による深刻な損害がない。外部と城壁の砲台が敵の砲撃に激しく反撃した。市中にかなり多くの砲弾が落下したが、市内の人心が揺るがなかった。市民や軍の決意や冷静さがこの酷い砲撃に良く耐え、敵の威嚇がかえって我が民衆の勇気を強めるものでしかない。各自は、祖国がパリ防衛者に求める大きな義務を感じ取っている。

昨日、パリ総督がパリ住民に宛てた壁書きの宣言⁶³。

今、敵が威嚇を倍加する努力をしようと、欺瞞や中傷でパリ市民を悩まそうとする。守備に対し、我々の苦痛や犠牲に付け込もうとする。何事も、我々に手中の武器を離させない。勇気、信頼、愛国心だ。パリ総督は、降伏しない。

『ヴェリテ』⁶⁴ という新聞社の社長が政府の壁書きを誹謗する文を数章記

60 シャン・ド・マルスを指すと思われる。

61 パリは、晴。

62 1月7日付官報。

63 1月7日付官報。

64 La Verité 「真実」という意味である。

していた。その一章では、次のように言う⁶⁵。

政府は、敵軍の猛烈な襲撃に対する2つの壁書きを発表した。1つを一昨夜、他を昨朝、市中に発表した。去る9月4日、国の体制が一変し、共和制度となって以来、政府が市内にその真意を明らかにするよう務めてきた。そこで、市内に発表した文書が正直であり、添削の跡がない。しかし、ストラスブル要塞とメッス要塞が陥落し、オルレアンに敵が略奪侵入した後、度々言うことが違った。それが民衆の信じ、納得しない一因である。そこで、人心が一日で離れようとする。現在、危急が切迫するが、今日まで、その弊害を見ないのは、思わぬ幸運である。

一昨日、政府が市中に発表した文書中に、怪しい、疑わしい、そのため、信用できない一文言があった。つまり、我が市内の人民は、近い内にロワール軍が敵を撤退させ、北部軍が我々の救援に向かうのを見るだろうという。この文が曖昧で不確かな失言である。ロワール軍が敵を打ち負かし、北部地方の国民衛兵が我が市の応援に来ることだ。ロワール軍の敵を追い払い、北部の国民衛兵がわが市に応援に来るという2点について、いつ、どこでその根拠となる報告があったのか。市民や我々がまだその報告を聞かない。最近、新聞報道での政府発表は、プロワ、ヴァンドームやヴァールの諸地方や市全てが普軍に略取された等々という。他に異なる発表を聞かない。そこで、政府がその後の報告を得ても隠し、市民に発表しないことが明白である。今、尋ねるが、このロワール地方の兵が敵を攻撃し、また、北部の国民衛兵が我が市の応援に来るならば、どういう形や状態であるのか、教えて貰えるのか。もしそれを教えて貰えないのならば、政府の一昨日の発表が明白に嘘偽りである。もしそうであるなら、今の政府の罪も軽くはない。なぜならば、今日わが億兆の住民が全く政府の発表を信じ、その方向を求め、死生の間を歩き回っているからだ。そして、その文の最後にある、「仏国万歳、共和国万歳。」は、仏人が常に唱える国の言葉、祝いの言葉である。この言葉は、共和政体

65 出典未確認。

に变革以来、今日に至るまで政府公文書の文末に記す、定型の無用の文である。今この言葉が何に役立つのか。この古い言葉は、今日の仏国やその共和政府の命を救えない無駄な言葉である。

また、第二の文章は、昨日発表されたが、その意味が極めて古めかしい。今日になり、民衆に対し、しきりに義勇や報国を求めるが、当然民衆が分かっていることである。恐らく、政府がその義勇報国の防戦力がもはや不足するだろうと推察するのだろう。ただし、これらの文意をここで批判することが主ではない。しかし、その末尾で、「パリ総督は、降伏しない。等々」と言う。この言葉の意味が最も分らない。今、その約束の主意が何か。敢えてその回答を求める。これは、人民の命に関わる重大事件を軽率に扱うものではないか。なぜならば、今、市内の人民が一致協力し、あくまでも防戦し、開城をしないという者は、ただパリ総督一人だけではない。また、その一人に限られない。市民全てでなくてはならない。なぜ、今、我が総督がこのような一言を市民に発表したのか、または、今、市民達が容易く開城を図って良いのかと恐れる。今夜、時既に深夜に及び、新聞を発行する時間が迫る。そして、文章を続ける時間がない。今私は、上の最大の疑問を挙げ、謹んでその答えを待つ。上を仰ぎ、政府の弁明を、下に伏し、市民の回答を求めたい。私とその解説や討論を聞いた後、全てこれを新聞に書き、広く公開しようと。等々。私は常に嘆く。仏国の人民の心は、傲慢で上司を恐れず、政府に遠慮せず、勝手にその政治体制を誹謗し、その政府を軽蔑するという、その習慣が常にパリの風俗である。そして、彼らは、その舌先の才能を発揮し、容易に国の政治を喧しく罵るが、もとより出て、重要な国政を担当できない。無用に市民を煽り、過激に動き、その政府を变革しようとし勝ちである。そのため、権力が大体民衆にあり、政府が深く民衆を恐れる。もっとも政治の道の奥義は、ここが拠り所であればならないが、その民衆の上に立つ者としての威厳や権力は、当然その主導者にある。思えば、仏国のような国は、傾向として、ナポレオンのような帝王が上において、自ら市内を足元

に治め、全国を一つに掌握しなければ、とてもこれを制御できない。とても、この傲慢な人民では、民主共和の政治は永く行なえないだろう。以前その国の体制を変革し、共和制度を立てた後から我々は、次第に密かに、このトロシュウ・パリ総督・大統領やその他共和政府各閣僚の進退や挙動を見てきたが、その処置が常に市内の人心に媚びるようであり、今仏国が危急存亡のときに至っても、なお、ただその人心を宥め、安心させ、密かにその衝動を押え、政府の計画を進めることが難しい。そこで、民衆の意見が常に政府の上にあり、新聞社の論者でさえ、その大ききで傲慢な言葉が極みに至る。有識者は、さらに激しい。そして今日、その国家が興廢の日に至っても、政府と民衆の間の実情が大体このようである。その国の政治状況が推察できる。今、私は、拙い文章力を尽くし、前の文章を要約した。これはつまり、後日、事情を顧みる時の参考にするためである。

1月8日⁶⁶

パリ市総督から発表の1月7日付戦況報告⁶⁷による。夜と日中のある時間、敵軍がサン・モール砦とシャンピニー橋付近の建物を砲撃したが、成果がなかった。ノジャンとロニイ要塞で微弱な砲撃による微かな損害があり、誰も傷つかなかった。ノワジイ要塞では、3個の強力な舷側砲により敵の全砲台を砲撃した。今朝8時から敵軍がクールヌーヴ要塞への砲撃を再開し、負傷者3名、死者1名があった。イッシ、ヴァンヴ、モンルージュの3要塞への砲撃が一時極めて激しかったが、工事に少し損害があり、死者4名、負傷者が数名であった。オット・ブリュイエールとムーラン・ド・サケの前線砦では、敵の砲火が前日より少し弱く、工兵大尉1名を含む負傷者5名であった。ビセートル要塞に若干の砲弾が落ちたが、誰も傷つかなかった。ティエの敵軍砲兵が我がヴィトリ近くの砲台とセイヌ河左岸に向け砲撃したが、成果がなかった。我がムードン要塞も第6と第7地区

66 パリは、曇。

67 1月8日付官報。

を砲撃し、市民のみが苦しんだ。また、ポワン・デュ・ジュール⁶⁸とブローニュ（この町はパリの西南の隅にある）で数名が負傷した。南部前線からの報告全てが今夜シャティヨン平原でのかなりの集結を知らせている。等々。

普軍が今パリ市城周囲に配備をし、日夜遠く市内の市街を攻撃する長大砲が欧州でも比類ない独国の有名なクルップ砲（クルップは製造者の名である）で、この大砲200門をその城の外郭に配備し、1門ごとに砲弾400発を配分し、総計が8万発だという。

普軍がパリ東側の諸要塞に向け約80門の砲を備え、これを仏側要塞に向け、毎日発砲した。この時、仏前線要塞や周囲の村に乱れ落ちる弾丸が約2万発だという。

南部の諸要塞や市内市街に乱れ落ちる弾数は、大体上の文と同じである。クルップ砲は鉄製の後装砲であり、その口径が仏国の単位では、223ミリメートル（日本の7寸3分5厘9毛）の大砲である⁶⁹。その重量が仏国の単位では、2万5千キログラム（日本の6,667貫）である。その砲弾を仏語でオビュス（obus）という。鉄製砲弾のことであり、その形は先の尖った円柱である。その略図を下に書き付けておく。

（原本に以下の長さや直径の砲弾の図）

長さ 1尺8寸1分5厘、その径 7寸3分5厘9毛⁷⁰、その重量が142キログラム（日本の37貫867匁）この弾丸の速力は1秒間に仏国の尺度で420メートル（日本の231間）を進み、一昼夜に150発を発射する。その距離が9キロメートル（日本の2里11町）に達する。欧州の陸軍では未曾有の長大砲であり、人が舌を巻き、胆を冷やす。

1月9日⁷¹

68 パリ市東南端のセイヌ河畔。

69 1月9日付 Gaulois。

70 1月6日付官報掲載戦況報告記載の不発弾の寸法が口径0.22m、長さ0.55mとされているのとはほぼ合致する。

71 パリは、曇、午後雪降る。

1月8日付戦況報告⁷²による。敵軍の砲撃が前日と同様に続く。要塞の守備兵も市民も団結が変わらない。今日、パリ総督が敵砲火に曝される城壁の全要塞を巡察し、パリ市民の愛国心の大きな発露の証を直接見た。

昨日パリ市内諸区中への発表⁷³。

現在、我が都市パリが包囲され、籠城が既に長い。先日、市中に発表したように、大麦小麦全て穀類を貯蔵する者は、これを政府に申告せよ。政府はそれを相当の値で買い入れる。この穀類を市中の食料のパンに使う。この命令に違反し、隠し、貯蔵し、出さず、籠城後に商務大臣の許可証なく穀類を売り出す者を罰し、500から1000フランの罰金を課す。等々。

パリ市長から第2区への1月8日付発表⁷⁴

最近、敵軍の砲弾が日夜市内に雨霰のように乱れ落ち、市中北部の市民には、体や家が傷つく者が少なくない。そこで、その災害を避けるため、市内第2区に転居する者が非常に多い。そこで、この区に空き家、空き部屋を所持する者が貸して欲しい。もっともその貸借の方法は、この区の区長から切符を渡すこととする。

今日、パリの環状鉄道の全ての駅での掲示⁷⁵

砲撃のため、環状線の鉄道の運行を一時、中断する。また、遊覧船（バトー・ムーシュ）の1隻が砲弾で沈められたので、遊覧船のポワン・デュ・ジュールとアルマ橋の間の通行を中断する。

昨日、セイヌ河左岸の市内リュクサンブール地区で若干の砲弾が散乱し、家屋を焼失させ、負傷者が少なくなかった。その中、路上で男性1人がその頭を砕かれ、倒れ、亡くなったことが憐れだ⁷⁶。

新聞中に現在のパリ市城守備兵の数を記載する⁷⁷。海陸の正規兵士7万5

72 1月9日付官報。

73 出典未確認。

74 出典未確認。

75 1月10日付le Temps。

76 出典未確認。

77 出典未確認。

千人、諸地方からの国民衛兵9万5千人、パリ国民衛兵45万人、寄集めの救援兵士3万人、全て合計が65万人以上という。

1月10日⁷⁸

パリ総督の1月9日夕刻発戦況報告⁷⁹による。昨日午後、マルメゾン脇で、敵と数回の遭遇戦があり、今朝、攻撃が再開され、我が軍が敵を引き付け、損害を与え、退散させた。パリのパンテオン付近と第9地区に多くの敵砲弾が落ちた。30発超の大口径の砲弾がピティエ病院に落ち、婦人が1名即死し、1病室の病人が地下蔵に移った。ヴァル・ド・グラス病院も同様に砲撃された。敵軍が市内の病院を標的に砲撃するようだ。この行いは、憎むべきであり、彼らが戦争法規や人道に背くのが一度でない。昨日、敵の砲撃が南部の諸要塞にも、終日続いたが、前日よりも激しくなかった。等々。

昨日、伝書鳩が市内に帰り、地方からの報告2通を運んだ⁸⁰。ガンベッタ内務大臣が送ったもので、地方の兵が日夜尽力してパリ市内の救援をしようとし、その兵の威力が大きく振るうという文であるが、極めて長く、内容が深いので、その抄訳をここに略記した。

上記伝書鳩と一緒に運んだ報道によれば⁸¹、ガンベッタ内務大臣は、12月20日ブルジェを退去し、リヨンに8日間滞在し、28日ボルドーに入った。また、地方都市ニューイ⁸²で仏軍1万 명이 2万5千名の普軍と戦い、仏軍の戦死が1,200名、普軍の戦死が北独同盟バーデンの司令官ヴィルヘルム親王⁸³を含む7,000名と目覚ましい戦果を挙げた。また、普軍は、仏領内に入りの後、この12月まで既に兵30万 명이 喪失し、寡婦10万 명이、孤児20万 명이 いる。現在仏内の独兵が60万 명이 いるが、内病人が10万人である。独軍が郷土防衛兵を召集するが抵抗に遭う。最近、我が地方を略奪し、蹂躪す

78 パリは、曇霧。

79 1月10日付官報。

80 1月10日付官報。

81 1月9日付官報掲載のアヴァス通信社の報道。

82 ブルゴーニュの町。

83 この時の戦死は誤り。1897年4月28日に没。

敵兵の掃討が大きな効果を挙げるといふ。等々。

西国の王（伊国王の子）⁸⁴が去る12月27日に、即位のため、同国に入国した⁸⁵。翌28日夜、首都マドリードで悪者がプリム元帥を射った。プリム元帥は、3発の銃弾を受け、傷が非常に重く⁸⁶、かろうじて命を保ち、その館に帰ったが、30日夜9時、ついに亡くなった⁸⁷という。翌31日、西国の新王は、即位の儀式を広く、全国に公開し、その法令を發布したという。

この日、西国文民政府は、民兵を解散し、その武器の返納を命じた。同日中に大半の武器は返納されたが、同夕、返納されない武器の搜索が家毎に行われる。⁸⁸等々。

欧州列国には、国際法の規律の下で互いに対戦する。そのため、守備側がその本城に籠城したときに、攻撃側が落城させるために他の方法がなく、その市城に対し砲撃しようとするときは、これを砲撃する前に使者を出してそのことを守備側に伝え、これにより、その守備側の市内の老人、幼児、婦女、病人や外国人達をその場所から退け、避難させる。その後、攻撃側がこれを砲撃する。これが近世の欧州の国際条約であり、列国軍事法規中の一規則とする。しかし、今回、普軍がパリを囲んで後100日の12月27日以来、勝手にあの長距離砲を使い、遠くからその諸要塞や市内の市街を破壊し、好き勝手に攻撃するが、以前にこのようなことを聞いたことがない。1月1日以来、頻繁にその砲弾を飛ばし、傲慢、残酷に、市内を射撃し、爆弾が病院や負傷者がいる建物内に落ち、そのために死傷する者が少なくなる。仏人がこれを罵り、怒り、その行動を残忍の極みと怨む。そこで、今日、仏政府が協議し、普軍が都市砲撃の国際戦争法規に従わず、傲慢残酷行為をすとした文書を外務大臣が広く欧州各国政府に送ったという⁸⁹。等々。

84 アマデオ1世。

85 1月8日付le Figaro。

86 1月9日付官報。

87 1月9日付le Figaro。

88 1月9日付le Figaro。

89 1月10日付官報に外務大臣が欧州各国駐在仏外交使節に訓令したと医師団からの病院への砲撃への非難文を掲載する。

私が考えると、普軍は、始めはパリ籠城を、その人民の意見が一つに纏まらないので、必ず近い内に市内が混乱し、直ぐ開城するだろうと思った。しかし、今や籠城が既に100余日に及び、未だに開城の様子がなく、そこで、速やかに開城させるには、その中の老人、幼児、婦女を避難させずに、早く城中の食料を尽きさせ、その後さらに一発が雷のような轟音の砲弾で日夜その市内に爆音を散乱させ、先ず、婦女子を恐れさせ、次に、市民の肝を冷やさせ、急に市内を混乱させ、開城を速やかにしようとの策略に出たのだろうか。しかし、この都市攻撃の戦時国際法は、当然、強大な国であっても破って良いものではない。そのため、国際法上も、その行いが残忍で横暴といっても良いだろう。しかし、私が思うに、普軍には知識や勇気のある良い将軍がいる。そうであれば、なぜその強大な力を背景に強暴を示し、国際法を犯すのか。従って、兵力の強大な者は、その重要な法律を正しくし、その国際法を守らせるよう努める必要がある。これは、強者が他者を制御する方策ではないか。人がもし、その強大な力に任せ、その法律を疎かにすれば、どうして国際法や制度を実施できるのか。このとおりであっても今日、欧州の事情は、強国が必ずしもその古い法律や前例を第一とせず、殊更に力づくで百戦百勝した後、隣国を分割し、土地を併合し、その勢いで掟を定めようとする。今日の欧州は、強猛な者の考え次第である。先日、ナポレオンが普国に向かい、開戦したとき、その大義名分をどうしたのか。一学生に過ぎない私がこれを見ても、傲慢や嫉妬により強暴な力を振るうという外は、ない。これが概ね今日の欧州の変動の事態ではないか。今、仏国がこの事態になり、欧州各政府に通牒を送るのは、後日、責任追及の一つの世論を促す意味のものなのか。しかし、天下の国際法を一日でも忽せにしてはならないと私が思う。その上、欧州の人は、常にその文明開化を世界中に誇る。恐らく、その意味は、法律を尊び、強大な力で思うままに他国に乱暴をしないことであろう。そうであれば、今、仏国が急いで軍使を普国の本陣に遣り、その誤りを数え、その過失を詰問し、2国が各々法律を犯さず、公明に、快くその戦争を遂行するのが良い

であろう。また、パリ市内には欧州各国の外交使節が無数在勤し、その市内に居住するその国民の生命を預かっている。それなのにこの外交使節達は、攻撃側が残忍に噛み破るように国際法規律を破るのを目の前にしながら、何もせず、黙って傍観する理由があるのか。今日の状況で、列国の使節が手を控え、座って見て、進んで責任追及する様子がない。強者に不正を放置する者といって良い。

1月11日⁹⁰

パリ総督が市中に発表した昨日付戦況報告⁹¹による。昨夜、普軍前哨に対し、2作戦があった。北方前哨の戦いをコント大佐が指揮し、一戦で普兵2名を捕虜にし、かつ多数の兜、小銃、夜具、露営用品を分捕った。我が軍損害が重傷者1名を含む、7名の負傷者人のみだった。南方前哨の戦いをポリオン大佐が指揮官し、この軍が普兵21名を捕虜とした。我が軍で戦死は1名、負傷3名、内1名が士官であった。また、ヴィトリ付近の偵察で国民衛兵1名が負傷した。今日、諸要塞への敵の砲弾の飛来が昨日ほどではなかった。

12月28日付ロレーヌ発報道による⁹²。現在、独諸要塞には、既に仏捕虜が充満する。そのため、新たな仏捕虜を仏国のメッス周辺の大要塞に入れるという。収容できる捕虜が1万2千名から1万4千名だという。

8日から9日への夜、サン・シュルピスからオデオンへの地区に2分間隔で砲弾が落下した。病院、救急車、学校、博物館・美術館、教会、家屋が負傷者で溢れた。路上や自分の寝床で婦人が死んだ。母に抱かれた子供に弾が当たった。ヴォージラール街の学校で1発の砲弾で児童4名が即死し、児童5名が負傷した。植物園（ジャルダン・デ・プラント。パリ市内の動物学、植物学、鉱物学の広大な場所で世界の植物、万国の鳥獣、海山の動物を集める）中の病院に砲弾が数発飛来した。負傷者と職員が河岸の建物

90 パリは、雪降。

91 1月11日付官報。

92 1月10日付官報掲載の1月3日付 *Nouvelle Gazette de Prusse* 報道。

に避難した⁹³。サルペトリエール病院に15発超の砲弾が飛来した⁹⁴。ピティエ病院に若干の爆弾が落ち、婦人3名が死に、他にも負傷者がいる⁹⁵。

昨日、私は風邪気味で熱があり、夕方から寢床に入り、夜中に熱気がしばしば襲い、眠れなかった。夜通し床で聞くと、独国の長距離砲の弾が市内市街に雨のように降る、轟きや震動が極めて激烈で、私の近くの街に爆音が破裂するようである。夜11時以降から夜半を徹し、明け方3、4時が最も猛烈であった。

1月12日⁹⁶

1月11日付戦況報告⁹⁷による。昨夜中、諸要塞に敵が砲撃し続けたが、これまで同様、僅かの負傷者とともに足らぬ損害のみであり、火災の報告もなかった。日中、南部の諸要塞への砲撃が極めて激しく、主に敵の主目標とみられるイッシ要塞に向けられた。オット・ブリュイエール、ムーラン・サケ、クレトイユへの砲撃が軽微で被害なし。等々。

1月8日から9日の夜、パリ市ピティエ病院に砲弾が殺到し、管理棟と病人を収容する建物が大損害を受けた。婦人科病室への砲弾で死者1名、負傷者2名が出た。砲撃の当初、故意と思わなかったが、昨夜、同じ方向から同じ場所に砲弾が炸裂し、用心のため、病人を安全な場所に移した。この仮借なさが病院を狙い撃ちした野蛮な残酷さを意味し、古来の戦争に前例がなく、権利、文明、人道の名で抗議するために、事実を公表する。等々⁹⁸。

昨11日午後、普軍中から軍使が仏軍の前哨に送り届けた手紙があった⁹⁹。英外務大臣がこれを送った。その文の趣旨が以下のとおり。かつて、露国が黒海を手に入れ、トルコの地を併合しようと問う文書を欧州諸国に回し

93 1月11日付le Temps。

94 1月12日付官報。

95 上記le Temps。

96 パリは、曇。

97 1月12日付官報。

98 1月11日官報。

99 1月13日付官報にファーヴル外務大臣が英国外務大臣とのやり取りが公表され、10日夕9時同文書を中立国の米公使から入手とする。独側が通行許可証を発給しない等でファーヴルが欠席することになった。

た。1855年、露国が黒海を手にし、トルコの地を侵略し、欧州の有力者達が団結し、これを拒み、露国と戦い、露軍がその境界を侵略してはならないという条約を作り、その境界を決めた。このとき、ナポレオンⅢ帝が率先し、トルコを救い、露国を拒む戦争をした。今日、欧州の事情が混乱する機会に乘じ、露国が再びこの条約から脱退し、その長期計略達成しようとする。そこで、この照会文を各国に回した。今度、ロンドンで各国代表がその件を拒むか、許すか、2方向の判断につき相談する。そこで、ファーヴル外務大臣を会議に出席させるため、文書を送った。今夕6時半、仏政府の諸閣僚、高官が政府に集まり、その件やその会議に出席するか否かを議論する。しかし、外務大臣の出席の可否が未だに分らない。

フリードリヒ・カールは、独国の王族であり、勇敢で才智武勇をもって戦う。常に先頭で大軍を率い、その指揮が非常に細部にまで行き届く。先日以来、オルレアンの一戦で負傷し、陣中に退くというパリ市内の噂があるが、人はその確証を得ていなかった。しかし、この5、6日より前、パリ市内のセイヌ河水面に浮き、流れる一つの瓶を見て、きっとスパイの密書だろうと疑い、人がこれを取り開いたところ、やはり数通の書類があった。つまり、パリ市外東部の町モーに布陣する普軍が河水沿いに流し、市内を通過し、その西部の普軍に送る書類であった。その中に我が先陣の指揮官フリードリヒ・カール親王が先日の戦いで傷つき、今、モーの陣中で療養すると書いてあった。この文書を直ぐに新聞社に行き渡らせ、広く市内に公表したが、その真偽が分らなかった。ところが、一昨日の戦いで捕虜となった普兵18名を仏軍の要塞に輸送したときに、仏人がその真偽を探るため、突然この捕虜に、その後フリードリヒ・カール殿下の傷の具合はどうかと尋ねた。普国の捕虜兵が大変驚き、仏人が早くもその状態を知っていると察し、躊躇なく即答し、私は、最近、彼の消息を聞かないが、彼が以前重傷を負ったという一報を知るだけであると言った。そこで、市民が初めてその事実であることを知ったという。¹⁰⁰

100 出典未確認。

昨日、市内南部のモンルージュ大通り¹⁰¹の街で約50歳の婦人が哀れにも砲弾で二分されて亡くなったという¹⁰²。等々。

1月13日¹⁰³

昨12日付戦況報告¹⁰⁴による。昨11日夜、わが前線の兵隊がアヴロン高地を偵察し、敵兵を追い払い、兵士6名を捕虜にした。昨夜中、パリ市内と目立った施設に砲撃が続いた。夜半から明け方2時過ぎまで、サン・シュルピス地区に約1分間に1発砲弾が落ちた（その猛烈であることはまた想像できる）。前日と同様、城外の南北諸要塞が砲撃を受けた。我が諸要塞も多く応戦の発砲をし、敵に損害を与えた。国民衛兵少尉1名がクレトイユ前哨付近で亡くなった。等々。

パリ市内に発表の11日付国防政府令¹⁰⁵

普軍の砲弾で傷ついた全仏国民を敵に襲われた兵士とみなす。

砲撃のため亡くなった者の寡婦や同様に亡くなった父母の孤児は、敵に殺された兵士の寡婦や孤児とみなす。

新聞¹⁰⁶が記載する欧州4大国の面積と人口が次のとおり。

普国が現在領有する仏国のロレーヌとアルザスの2地方をその面積と

	面積（平方独マイル ¹⁰⁷ ）	面積（方里 ¹⁰⁸ ）	人口（人）
独国	9,301	2,791	40,148,209
仏国	9,588	2,876	36,528,548
露国	100,285	30,085	69,779,500
奥国	10,780	3,234	35,943,592

101 モンバルナス地区（パリ14区）にあり、1879年「エドガー・キネ大通り」と改称。

102 1月12日付 le Figaro。

103 パリは、晴霧。

104 1月13日付官報。

105 1月12日付官報。

106 1月12日付官報引用の独紙 la Correspondant de et pour l'Allemagne (Korrespondent von und für Deutschland)。

107 1独マイルは、7.5325キロメートル (km) であるので1平方独マイルは、56,7386km²となる。そうすると本表の独、仏、露と奥のkm²での数字は、527,725、544,099、5,690,026と611,642となる。なお、現在の国連続計上の欧州の仏の面積は、551,500km²である。

108 正元試算である。1里四方では、15.423km²であり、計算が合わない。

人口に含み、仏国の面積と人口から除く。

今朝から市中のパン焼き職人の多くがその戸を閉ざし、売っていない。市民の大きな騒ぎが起こり、人々が困窮する¹⁰⁹。

1月13日付戦況報告¹¹⁰による。昨夜、従前と同様、諸要塞に効果はないが、激しく永続的な砲撃を受けた。そして市街への砲撃が止まず、夜10時から夜半まで最も激しかった。南部要塞への砲撃の激しさが緩み、何回かの敵軍の襲来を全て撃退した。多くの敵負傷者が捕虜になった。17日間に渉る敵軍の砲撃が莫大な弾薬を費やしたが、深刻な損害がなかった。この厳しい、長く続く難儀の中、我が軍の諸士官、兵士と国民衛兵が示した絶対的な献身の輝かしい証拠を報告できることを総督が喜びとする。また、市民の固い決意に感動する。

1月12日付パリ市内に発表の国防政府令¹¹¹。

公共や一般目的の他に、パリ市各区や郊外各町村での手押し車で運べない物の輸送の必要性等を考慮し、地域住民に必要な馬数の表を作成する。その表は、市内20区で保持する馬を、人口千人に約1頭の割合とし、その馬数を、第1区馬78頭、第2区同じ、第3区96頭、第4区同じ、第5区98頭、第6区90頭、第7区69頭、第8区75頭、第9区102頭、第10区141頭、第11区183頭、第12区100頭、第13区80頭、第14区82頭、第15区93頭、第16区44頭、第17区120頭、第18区154頭、第19区113頭、第20区108頭、計2,000頭とする。郊外諸町村につき、同じ方法でセイヌ県担当閣僚が後に定める。市内20区の各区長は、夫々の区の状況を農商務大臣に16日夕刻までに報告する。農商大臣が本命令を執行する。等々。

1月13日付発表の閣僚・パリ市長の告示¹¹²

109 1月13日付官報掲載の12日付パリ市長命令で、上等のパン（パン・ド・リュクス）の製造販売と小麦の篩分けが禁止された。

110 1月14日付官報。

111 1月13日付官報。

112 1月14日付官報。

パン屋は、その通常の顧客でない者又はその地区の住民であることを示す食糧配給証を持たない者にパンを売ってはならない。

(巻の5完)

